日本SPF豚協会だより
Report of JAPAN SPF Swine Association 2008.10 第33号

日本養豚学会「第2回養豚功労賞」

赤池洋二会長受賞に寄せて

北海道大学名誉教授
日本ＳＰＦ豚協会ＳＰＦ豚農場認定委員会委員
波岡　茂郎

このたび、日本ＳＰＦ豚協会の赤池洋二会長には、日本養豚学会より「第２回養豚功労賞」が授与され、まことにおめでとうございました。ここに心からお祝い申し上げます。

今回の受賞は、赤池会長の長年にわたるＳＰＦ養豚技術の開発・研究とともに、これをわが国養豚界に普及したことが、養豚技術者および養豚家にあまねく認知されたことにほかなりません。

顧みますと、戦後わが国における畜産振興の一環として養豚事業は急速に発展しました。しかし、当時、多種多様の感染症によって、その生産性が著しく阻害されたことはご承知のとおりです。

養豚における生産性は、育種改良された豚が、健康な状態を保つことによって向上することは自明の理であり、いわば車の両輪です。

しかし、これを実現するための手段としてのＳＰＦ状態の具体化が、とくに専業養豚に求められますが、これを認識させ、養豚産業へ普及させるために、赤池会長が並々ならぬ決意をもって、官および民間への説得に努力されたことに対し、私どもは敬意の念を禁じ得ません。

さらに、赤池会長は、高いレベルのＳＰＦ養豚をめざして認定制度を設立、ＳＰＦ豚農場の関係者が、自ら高い技術を開発するため切磋琢磨するよう指導されたのです。

現在、日本ＳＰＦ豚協会は有限責任中間法人として、いわば公的な機関として活躍しておりますが、これも赤池会長とその協力者の方々の、長年の努力によるものと敬服いたしております。

一方、わが国における豚肉の需要の60％を輸入に頼っている現状をみるとき、国内にあっては海外によるものと比較して、質の高い豚肉の生産こそが生きる道です。

最近、にわかに地球温暖化対策の一環として、バイオエタノールの生産が加速し、このため輸入飼料原料の高騰が憂慮される一方、消費者は食材の安全・安心を切に求めています。この時にあたって、わが国の養豚界に求められるのは、まさにＳＰＦ養豚ではないでしょうか。

赤池会長は早くからここに目を据えて、その生産・普及に努力を続けてこられました。どうか、これからも指導力を発揮され、わが国ＳＰＦ養豚のさらなる発展に尽力くださることをご期待申し上げております。

(6月11日に行なわれた祝賀会で述べられた祝辞より抜粋)

ＳＰＦ豚セミナーを開催します

昨年に引き続き最優秀ＣＭ農場の表彰も

10月28日（火）東京・ＫＫＲホテル

昨年、一昨年と協会主催の交流会を開催いたしましたが、その際「年に一度、関係者が集まるせっかくの機会なので、以前のセミナー形式を復活させてほしい」とのご意見を数多くいただきました。

そこで今年は講演会を中心とした「ＳＰＦ豚セミナー」を復活、開催することといたしました。

セミナーの目的は会員への情報提供、相互交流、ＳＰＦ養豚の普及促進などです。今回は主に会員・関係者の皆さんへの情報提供に重点をおき、現在の畜産を取り巻く環境の厳しさから、高い関心が寄せられているテーマについての２つの講演をメインとしました。

まずは「これからどうなる　飼料原料」と題し、全農畜産生産部海外事業課課長、落合成年氏にご講演いただきます。

昨今の飼料用穀物および原油をはじめとする諸燃料の急激な高騰や不安定な価格変動は、生産現場にとっても大きな問題となっており、今後の動向について不安は増すばかりです。

落合氏は全農の海外事業畑のスペシャリストで、高い見識と豊富な経験をお持ちです。原料市場の現状や今後の見通しなどについて、専門家の立場からわかりやすくお話しいただきます。現状に対する正しい知識と情報を得られる貴重なお話になると思います。

もう一つの講演は「動物福祉」（アニマルウエルフェア）がテーマです。講師は（社）日本養豚協会常務理事の小礒　孝氏です。小礒氏は養豚全般に関する幅広い知識と情報を持つ専門家であり、また多忙な本業のかたわら数多くの資格を取得されている話題豊富な方です。

小礒氏には、最近畜産現場でも関心が高くなっている動物福祉について「動物福祉と養豚生産性を考える」と題した講演をしていただきます。

また、セミナーでは、昨年に引き続き生産成績優秀農場の表彰も執り行います。

これは過去３年連続して総合生産指数が上位25％に位置する農場を対象に、３年間の指数の平均値が最高である認定農場を総合生産成績最優秀賞に、同じく商品化頭数（１母豚あたり年間肉豚出荷頭数）が過去３年間の平均値でもっとも多かった認定農場を商品化頭数最優秀賞に、それぞれ選出、表彰するものです（当面の間は一貫生産農場のみを対象）。単年度の数字にもとづく表彰でないのは、３年連続して上位25％に位置する成績を残すのは簡単なことではなく、安定して高成績を維持できている農場の実力を示すものだからです。

新しい生産成績評価基準による成績評価が行われるようになってから、「数字に裏打ちされた成績評価なのだから、優秀農場を表彰することは生産者の励みにもなるのでは」という声があがるようになり表彰制度がスタートしました。すでに認定委員長、正副会長を中心とする選考委員会を開催、厳正なる審査の結果、表彰農場が決定しております。当日発表となりますので、楽しみにお待ちください。データの公表方法などについても現在検討中です。

高成績を収める農場にはそれなりの創意工夫、努力があるはずです。そこで、セミナーの中で表彰農場に業績発表をお願いすることとしました。貴重なお話には成績向上へのヒントがかくされているかもしれまん。ぜひ参考にしていただき認定農場全体のレベルアップにつながればと思います。

セミナー終了後には恒例のＳＰＦポークをご賞味いただく懇親会も開催いたします。会員はじめ多くの皆さんのご参加をお待ちしております。

平成20年度 ＳＰＦ豚セミナー 開催要項

日　時　平成20年10月28日（火）13：00～

場　所：ＫＫＲホテル東京（地図参照）

10階「瑞鳳の間」

プログラム

●開会のあいさつ

●生産成績優良農場表彰式　13：05～13：45

・生産成績上位農場の解説

・選考経過説明

・表彰（表彰状・トロフィー授与）

総合生産成績最優秀農場

商品化頭数最優秀農場

●表彰農場業績発表　13：45～14：45

総合生産成績最優秀農場

商品化頭数最優秀農場

休　憩

●講演

「これからどうなる　飼料原料」15：00～16：00

落合成年・全農畜産生産部海外事業課課長

「動物福祉と養豚生産性を考える」

16：00～17：00

小礒　孝・（社）日本養豚協会常務理事

会費：無料

懇親会のご案内

セミナー終了後、同会場にてＳＰＦポークの試食会を兼ねた懇親会を開催いたします。

毎年ご好評いただいている認定農場産ＳＰＦ豚肉のしゃぶしゃぶや、ＳＰＦポークのみを原料としたハム・ソーセージなどの加工品も多数用意する予定です。ＳＰＦ豚肉のおいしさをその場で確かめる大変よい機会です。ぜひ、ご参加下さい。

開催時間　17：30～19：30

会　費　5,000円

お申し込み方法

同封の申込書にて協会までＦＡＸでお申し込み下さい。

●申し込み期日　10月20日（月）必着

お申し込み・お問い合わせ先

（中）日本ＳＰＦ豚協会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
ニューセンチュリービル7F

TEL 03-5835-5375
FAX 03-5835-5376

KKR HOTEL 東京

〒100-0004　東京都千代田区大手町1-4-1

TEL.03-3287-2921　FAX.03-3287-2998

交通のご案内

●地下鉄東西線竹橋駅3B出口から専用通路

●首都高速環状線神田橋出口から2分

●ＪＲ東京駅（丸の内口）から車で5分

連載
豚の細菌病④

豚マイコプラズマ肺炎①

東京農業大学教授 山本 孝史

豚のマイコプラズマ肺炎は、*Mycoplasma hyopneumoniae (Mhyop)* によるカタール性の気管支肺炎を主徴とし、罹病率は高いが致死率はきわめて低い疾病です。罹病率が高いのは密飼により常に感染の機会にさらされているからで、病原体の伝播力が強いからではありません。実験感染豚を飼育していた部屋に、洗浄消毒もせず無菌豚を導入しても感染しなかったという実験成績が報告されているほどです。しかし、逆にバイオセキュリティに細心の注意を払っているにもかかわらず、本病フリーのＳＰＦ豚群が再感染する割合が年間６％に達するというデンマークの報告もあります。すなわち、病原体の伝播力は決して強くないという事実と、考えも及ばないようなわずかなスキからも感染が起こるという相反する２面性を持っているのが本病の特徴です。現在のところこの２面性は合理的に説明できませんが、本病対策上重要な示唆を含んでいます。すなわち、病原体の伝播力は強くないということは、間仕切り等で豚どうしが直接接触する機会を減らすことにより罹病率を下げることができるということを意味します。一方、わずかなスキからも感染が起こるということは、本病フリーを維持するのは容易ではないということになります。このようなことから本病に対しては、完全フリーを目指すよりも、罹病率を最小限に抑えることを目指すのが現実的ということになります。

臨床症状と病変：カラ咳以外の症状はありませんが、カラ咳が認められたら本病を疑って先ず間違いありません。本病の被害は飼料効率の低下によるものですが、その程度は病変の程度に依存します。すなわち、肺全体に対する病変部の割合が10％未満では影響はありませんが、10％を越えると、１日平均増体重が17.4％、飼料効率は14％低下し、また病変部の割合が10％増加するごとに１日平均増体重が37.4g低下することが報告されています。この報告では病変部の割合は面積比率ですが、体積比率で比較した別の報告では、病変部の体積が10％増加するごとに１日平均増体重が41.1g低下し、104.5kgの出荷日齢が16.7日遅延すると報告されています。

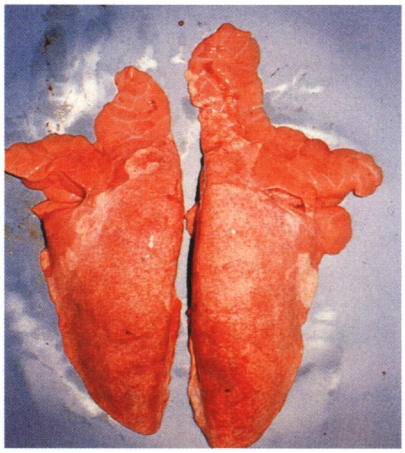


写真1　病変は前葉、中葉の先端部に形成されることが多い。

病変は、暗赤色～桃色～灰白色で、健康部との限界が明瞭で、肉様の無気肺として認められます（写真１）。病変部を切開すると、気管支に粘ちょうな滲出物が認められる場合と、粘ちょう度に乏しい浸出液があふれ出る場合とがあります。後者ではたいていパスツレラが混合感染しています。線維素性の変化が認められる場合、それは*Actinobacillus pleuropneumoniae (App)*による病変であり、*Mhyop*によるものではありません。*Mhyop*と*App*の混合感染はよく見られ、*Mhyop*は*App*の不顕性感染を顕在化させる働きがあります（表１）。

表１　*Mycoplasma hyopneumoniae* 感染は不顕性感染した *Actinobacillus pleuropneumoniae*を発症させる

*M. hyop*の人工感染	なし	あり
剖検時のマイコプラズマ肺炎	0/9	9/9
剖検時の胸膜肺炎	0/9	3/9
剖検時のAppに対する抗体	3/9	7/9

*Actinobacillus pleuropneumoniae*の常在する農場より購入した５週齢の子豚を２群に分け、１群は対照群とし、他の１群に*Mycoplasma hyopneumoniae*を人工感染させて５週間後に剖検した。

このため、マイコプラズマ肺炎のワクチン投与により、胸膜肺炎が減少する場合もあります。逆に*App*も*Mhyop*の病変を増悪させます。また*Mhyop*は、PRRSウイルスの感染を長期化させる働きがあります。PRRSウイルスは、サルモネラ、グレーサー病、レンサ球菌症、豚丹毒等の発症の引き金になりますので、マイコプラズマ肺炎は、単に肺炎による被害をもたらすだけでなく、玉突き的に様々な感染症を引き起こすことになると言っても過言ではありません。このようなことから、豚呼吸器病症候群（Porcine Respiratory Disease Complex）という言葉が広く知れわたるまでは、マイコプラズマ性呼吸器病症候群（Mycoplasma Induced Respiratory Disease Complex）という言葉が使われていたほどです。（以下次号）

ト◆ピ◆ッ◆ク◆ス・新農場紹介

由利本荘ＳＰＦセンター（秋田県由利本荘市）

全農畜産サービス㈱種豚事業部部長　宮部　潤一

農場建設

由利本荘ＳＰＦ豚センター（ＧＧＰ・ＧＰ併設農場）は、前号でご案内のとおり、今年４月末に完工しました。造成工事着工が平成19年７月、畜舎建設着工が平成19年10月、全体で約９か月の工期となりました。

弊社では、平成17年春頃から新種豚場用地の選定に入りました。秋田県下だけでも約25か所の候補地がありましたが、最終的に由利本荘市の候補地を、種豚場としての防疫条件が満たせる場所、また万全の環境対策がとれる場所として新種豚場の用地に決定しました。

秋田県由利本荘市は、平成17年３月22日に、本荘市と由利郡の７町村が合併して誕生しました。人口は約９万人、西は日本海に面し、東は出羽丘陵、そして南には東北の秀峰鳥海山が聳えています。市の面積は、1,209k㎡で、秋田県の10.7％、県内一の面積を占める市となっています。

本センターは、全農畜産サービスピラミッドにとって４つ目の直営農場となり、秋田県では秋田ＳＰＦ豚センター（大仙市）に次ぐ２つ目の農場です。

母豚規模は、常時1,000頭規模、ＳＰＦ種豚の出荷は、フル稼働時で年間6,700頭の出荷を目指しています。

農場の概要と施設の特徴

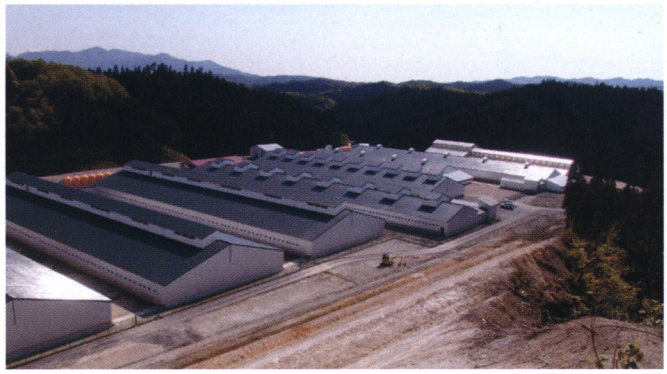
敷地総面積は約40ha、豚舎建設用地面積は約６ha。農場施設は、畜舎７棟、ふん尿処理施設３棟、その他付帯施設12棟となっています。

農場用地は、ＳＰＦ豚の種豚場としての立地条件に恵まれており、大規模な防疫緩衝地帯が確保できました。また、来客対応室や出荷施設、飼料中継所など外部との接触が避けられない施設についても、地形を生かし、畜舎から離れた場所に設置することができ、防疫体制を考えた場合、理想的な配置になりました。

本センターの特徴は、最新の技術を取り入れた畜舎施設・設備を採用したこと、さらに環境対策に最大限配慮をしたことです。

畜舎については、欧州最大の畜産施設会社である「ビッグダッチマン社」の最新技術（換気システム等）を採用しました。

ふん尿処理施設では、汚水処理に中空糸膜による処理に加え、脱色も可能な光酸化反応装置を装備した高度活性汚泥処理法を採用しました。堆肥化処理では、



縦型コンポストとオープン式発酵堆肥化処理装置を組み合わせた、より高度で効率的な堆肥化処理方式を採用し、高品質堆肥の生産を目指しています。

臭気対策として特記すべきは、全豚舎に全農が開発した最新の畜舎型ミスト消臭システムを装備したことです。さらに堆肥舎については堆肥舎内に前記のミスト式消臭システムを設置するとともに、従来のオガクズ吸着脱臭槽にミスト消臭システムを組み合せた脱臭処理棟も併設するという二重の脱臭対策を施しました。

農場の本格稼働に向けて

現在全農グループでは、「畜産基幹産地登録制度」により全国の養豚生産基盤の拡充を図り、平成19年度から22年度にかけ、肉豚50万頭の増頭計画を推進しています。本センターはこの事業の中心となるハイコープＳＰＦ種豚の生産と供給の基幹農場となります。今年の６月９日に原種豚導入が始まりました。現在は来年５月のＦ１種豚の供給開始に向け、社員が一丸となって、順調な農場立上げに取り組んでいます。

この最新式のＳＰＦ豚種豚場の稼働が、ハイコープＳＰＦ豚事業のみならず、日本のＳＰＦ豚事業の更なる発展と普及の一助となるよう、今後とも全社を挙げてＳＰＦ豚事業に取り組んで行く所存です。

紹介●ＳＰＦのお店⑥　旬菜 遊ふ亀

群馬県渋川市渋川1830-42
TEL.0279-22-5722

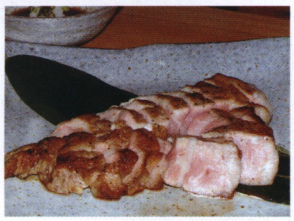
先号に引き続き、ＳＰＦポークにこだわる飲食店のご紹介です。

群馬県の中央に位置する渋川市。伊香保温泉郷などの玄関口、へそ踊りで知られる町の駅前に日本料理「遊ふ亀（ゆうき）」があります。

オープンしたのは平成18年2月。店主の大林基樹さんは東京の一流ホテルなどで板前修行をした後、出身地に近い渋川市に店を構えました。本格日本料理とお酒のおいしさで評判のお店です。

日本料理のよさを引き出すために素材にとことんこだわるという大林さん。鮮魚類は伊豆・伊東の知人を通じて取り寄せるほどです。

ＳＰＦ豚ポークとの出会いは１年ほど前、知人に連れられて、地元渋川市の認定農場・㈲ほそやの社長、細谷浩さんが店を訪れました。店の名物メニューである「ブヒテキ」（豚肉のステーキ）を食べた細谷さんが「おいしいから、ぜひ今度うちの肉も使ってみて」と農場産の肉を提供したところ、大林さん、すっかり気に入ったそうです。それまでは群馬県産の豚肉を使っていましたがＳＰＦポークに切り替えました。細谷さんも家族揃ってお店に通う常連さんに。



大林基樹さん。右の写真がＳＰＦポークをつかった人気メニュー「ブヒテキ」

「群馬県の豚肉のレベルは高い。中でもＳＰＦ豚は手をかけ過ぎず、素材そのものを生かす料理に合います。ブヒテキはくせがなくあっさりした味で女性にも大人気です」と大林さん。「こくという点で焼酎に合わせるのにちょっともの足りない気もしますが、日本酒にはピッタリです」。お近くの方はもちろん、会員の皆さんもぜひ一度お店に足を運んでＳＰＦポークのおいしさを再確認してみてはいかがでしょう。

●協会からのお知らせ●

●地域研修会が2地区3会場で終了

昨年度からの継続事業となっておりました地域研修会が７月、関東・北信越地区および中・四国地区で開催され、全地域での研修を終了いたしました。

関東・北信越地区では群馬県高崎市と茨城県潮来市の２か所で開催しました。まず７月１日、「高崎駅前プラザホテル貸会議室」において、15名の参加を得て開催いたしました。

高崎会場

続いて７月３日、「かんぽの宿潮来」を会場に行われました。参加者は20名でした。

潮来会場

最後に７月13日、岡山市の岡山県農業共済会館会議室において中・四国地区の研修会が行われ、18名に参加いただきました。関東・北信越地域は農場数が多いことから、参加しやすいよう２会場に分けての開催としましたが、残念ながら少人数の参加に留まりました。中・四国地域は農場数が少ない中、農場からの参加が目立ちました。ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。

岡山会場

認定農場を対象とした地域研修会は、今年度も協会事業として新たなテーマで開催の予定です。決定次第お知らせいたします。

かんたん、おししい　いのこ家林シェフおすすめ、ＳＰＦポークレシピ

秋味豚汁

レシピ提供：いのこ家総料理長・林　勝

今回は、秋の味覚たっぷり、豚汁のご紹介です。旬の野菜もたくさん食べられて栄養バランスもボリュームも満点。くせのないＳＰＦ豚ならではの体にやさしい一品です。

材料（4人前）
ＳＰＦ豚バラ肉　400g
大根　1本
人参　1本
ごぼう　1/2本
じゃがいも　4個、さつまいも　1/2本
つきこんにゃく（こんにゃくでも）1袋、豆腐　1丁
出し汁　1,200cc、味噌　40g
おろしにんにく　20g、おろししょうが　少々
白髪ねぎまたはきざみねぎ　適宜
一味唐辛子　適宜

つくり方
① 大根・人参はいちょう切り、ごぼうはささがき、たまねぎは薄切り、じゃがいも・さつまいもは一口大に切ります。豆腐はさいの目に切り、こんにゃくは適当な大きさに切っておきます。
② 鍋に出し汁を入れ、人参、大根、ごぼう、じゃがいも、さつまいもを入れて火にかけます。
③ 野菜に火が通ったら、適当な大きさに切った豚肉を入れ、味噌を溶き、味噌汁くらいの味に仕上げます。
④ おろしにんにくとしょうがを加え、豆腐、こんにゃく、たまねぎを入れて軽く煮立てたらできあがりです。
⑤ ねぎと一味をお好みで加えて召し上がって下さい。

【林シェフのひとこと】
ポイントは野菜を入れる順番と、味噌を入れて味が出来上がったら一度火を止めて味をしみ込ませることです。豚肉をあとから入れるのは、ＳＰＦ豚のやわらかさと脂身のうまさを引き出すためです。

●認定情報●

●平成20年度認定農場

［9月認定］(有効期間：平成20年9月11日から21年9月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション、ササキＳＰＦファーム、㈲山中畜産長沼農場、㈲浅野農場、㈲フロイデ農場、㈲道南アグロ栗山農場、**岩手県**・全農畜産サービス㈱東日本原種豚場、㈲ケイアイファウム北上農場、(農)八幡平ファーム、**秋田県**・全農畜産サービス㈱秋田ＳＰＦ豚センター、㈱フカサワ深澤スワインファーム舘合農場、㈲ファームランド、**宮城県**・㈱シムコ岩出山事業所、**福島県**・㈱シムコ浪江事業所、**茨城県**・常陽発酵農法牧場㈱、東京養豚農業協同組合岩井牧場、オヌマファーム、山本ファーム鹿嶋、㈲米川養豚場、**栃木県**・サンエス大渡農場、㈲Ｋ＆Ｔコーポレーション、**群馬県**・㈲小黒養豚、㈲ほそや、㈲畑中畜産、**長野県**・長野県農協直販㈱ＳＰＦ種豚センター、㈲岩垂原エスピーエフ農場、㈲タローファーム、㈲クリーンポーク豊丘農場、(農)エスピーエフこがねや第一農場、**千葉県**・㈲東海ファーム、㈲東海ファーム猿田農場、㈲東海ファーム第２農場、**埼玉県**・㈲松村牧場、**鳥取県**・㈱西日本ジェイエイ畜産上馬場農場、同矢下繁殖農場、同上馬場肥育農場、**愛媛県**・全農えひめ県本部広見種豚増殖センター、**香川県**・㈱七星食品多和ファーム、**徳島県**・日の出畜産(農)、**大分県**・㈲九重ファーム、**熊本県**・㈲高森農場、**宮崎県**・㈱ファームテックえびの種豚場、(農)守山畜産、**鹿児島県**・㈱シムコ鶴田事業所、㈱ファームテック大口農場、㈲新留養豚、鹿児島いずみ畜産㈱江内農場　　(以上47農場)

※次回認定委員会は平成20年12月4日（木）の予定

SPFのひと

㈲下山農場

下山　正大さん

●千葉県旭市

ひょんなことから豚の魅力にとりつかれ

南は美しい弓状の九十九里浜、北に干潟八万石といわれる房総半島屈指の穀倉地帯を持つ北総台地の温暖な地に「私はもともとサラリーマンの子供でまさか自分で豚を飼うとは夢にも思っていませんでした。ひょんな事から豚の仕事にふれることになり、その魅力にとりつかれ、とうとう自分で始めてしまいました。歴史はまだ20年強ですが、いっしょに良い会社を作っていきましょう。ウェルカム！！」というキャッチコピーでリクルートをされている㈲下山農場があります。スタッフの半数は20代という若さ（しかもその若さでみんな農場の主役級、諸先輩の良い刺激になっているほどです）、地域の業界内で人気の会社です。

そんな魅力的な会社を経営している下山正大さんは、船乗りの父を持ち、水戸で生まれ、鎌倉で育ち（かけっこの早い元気な子。今でも地区運動会の年齢別徒競争で一番）、船乗りを志すも視力が足りず断念、なら陸地！とばかりカウボーイになるため大学でサッカーをやる傍ら獣医師免許を取得し（鹿嶋アントラーズファンクラブ会員、経験・未経験者問わず、老若入り混じりの草サッカーを開催、参加希望者募集中）、埼玉種畜牧場で豚の管理を学び、日本屈指の養豚密集地域で契約獣医として従事したのち「豚の魅力にとりつかれ…」というキャッチコピーにつながります。

さらに自分で始めたもうひとつのきっかけは、成果を上げても正当に評価してもらえなかったこと、自分の思い通りに運営したいという思いが農場経営へと向かわせたそうです。そんな思いをスタッフにさせないようにと、給与など面接による年棒制の導入、誰の、どんな小さな要望でもうやむやにせず必ず回答し、可能な限り挑戦させてその経験から学ばせる。そんな環境・雰囲気づくりをすることに最も注意されています。

そのモチベーションを維持しつつ、当面の目標はスッタフのさらなるレベルアップを目指し（HACCP導入など）、現在の母豚300頭一貫経営農場と母豚350頭２サイト農場、合わせて650頭を、近い将来1,000頭にすることです。そして、早々に軌道に乗せ、後継ぎには特にこだわらず、気に入った人に売却して、第２の人生を歩んでいきたいそうです。そんな正大さんは、“さわやかな風が吹く、気持ちのいい人”という表現がぴったりな人です。正大さんのことをもっと知りたい方は、（http//www.shimoyama-farm.com）へアクセスを！いろんなことが…うふふ。（㈱シムコ　辻　博史）

編集後記

世界の経済、仕組みそのものが大きく変わろうとしている、転換点を感じています。これはピンチでもありますが、逆にチャンスかもしれません。変化をチャンスとして生かすのは知恵と努力。たとえば、日本の稲作技術をアジア全体に広く普及させ、米をとうもろこしに代わる飼料穀物にする。アジアの農村と都市の格差解消につながるかもしれません。日本の、そして世界の平和と安定に貢献できるのではないでしょうか。（哲）

日本ＳＰＦ豚協会認定農場産シール

このマークは
有限責任中間法人
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより
第33号　2008年10月1日発行（季刊）
発　行　有限責任中間法人 日本ＳＰＦ豚協会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375　FAX.03-5835-5376
e-mail：j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人　赤池　洋二
編集人　林　　哲